

## 雑司が谷を中心とした地域づくり

### ——大人と子どもの協働について考える

三田一則、平井憲太郎、渡邊隆男、小池陸子

中村雅子、薬袋奈美子、阿部 治（司会）

**阿部** それでは、これからパネルディスカッションに入りたいと思います。司会を務めさせていただきます、立教大学 ESD 研究所の阿部と申します。最初に、新たに加わっていただいた三田教育長と、としまユネスコ協会の平井代表理事から、それぞれお話をいただき、それらを含めた「雑司が谷を中心とした地域づくり」と「大人と子どもの協働」というテーマについて、皆さんで議論してみたいと思います。

**三田** 豊島区教育委員会教育長の三田と申します。教育委員会は雑司が谷について、万灯練供養あるいは未来遺産の取り組みに関する学術的な資料の提供をしてまいりました。また鬼子母神堂の重要文化財指定については、教育委員会と法明寺で申請をして、それが国に認められました。この重要文化財に指定された根拠は何なのかを示した上で、雑司が谷に存在する様々な歴史的・文化的遺産をどのように持続発展可能なまちづくりに生かしていけばいいのか、教育の立場から提案したいと思います。

雑司が谷の鬼子母神堂は、意匠的・歴史的価値があると評価されています。文化財保護法第二条の文化財の定義に当てはまるので、鬼子母神堂は有形文化財の指定を受けました。

歌川広重の『江戸高名会亭尽』に、雑司が谷の図が紹介されています。江戸中にある様々な名高い料亭を挙げたものですが、その図中で、子どもが持っているのがすすきみみずくです。また普段よりおめかしした女性が多く歩いています。参拝者の背後にあるのがケヤキ並木参道の料亭です。お祝い事として鬼子母神堂に大勢の人が集まっていることがわかります。このように鬼子母神信仰の姿が一枚の絵に象徴的に表れています。

近江住職がおっしゃるように、鬼子母神像に角がないのはなぜか、歴史的根拠を明確にしておく必要があります。角がないのは、本尊の鬼子母神像で秘仏です。これは鬼形ではなく天衣（てんえ）、つまり衣をつけて、片手にザクロを持ち、幼児を抱いた菩薩型の姿をしています。鬼子母神鬼像に鬼の角はありません。

文化庁が文部科学省に出した答申において、意匠的・歴史的価値が高いと記されています。とくにこの鬼子母神堂は建立年代が明確で、江戸の大家による寺社造営状況や拝殿組物も極めて明確で、幕府による建築規制への対応過程がよくわかるという点が評

価されました。幕府の儉約令等で、華美にならないことと同時に、威厳を示すことが求められました。拝殿と厨子のある本殿の間を相の間がつなぐ権現造になっており、歴史的価値が高いものです。

屋根は懸魚（けぎょ）と鬼瓦によって威厳のある銅葺きになっており、金の金具など様々な加飾を凝らしています。たとえば、カエルが両手両足を広げて踏ん張って、両方の下と上の梁を持ち上げているような格好に見えるので、蛙股／蟄股（かえるまた）と言います。それが何か所かで使われています。これは横の梁をしっかりと支えるという本来は物理的に建物を支えるためのものですが、加飾がされています。雲肘木（くもひじき）というものもあります。柱で梁を持ち上げているのですが、それも雲形をして造営的に非常にきれいな形に仕上げられています。そして日本建築独特の三斗組が見られます。升を組んでいって、升が多ければ多いほど屋根が重いということになります。こうした日本建築の代表的な構造をしているのも、鬼子母神堂が評価される由縁です。

本殿は畳敷きで、邑楽織の、最高級の天井です。金押しで、さらに黒漆で固められています。厨子の須弥壇は赤漆ですし、金の金具で装飾されています。この中に、秘仏の鬼子母神像が鎮座しています。本殿の厨子に使われている金は長持ちします。漆は黒でも赤でも湿度の高い日本の風土に合っていて、100年でも200年でも耐えられます。本物の漆の食器なら、壊れても修理可能です。ですので、大事に使えば非常に長もちします。持続可能な素材を最初から使っている先人の先見性、日本の匠の業のすごさを改めて感じます。ヒノキ、ケヤキ材が多く建物には使われておりますが、1000年かかって育った木は製材して上手に使うと、また1000年生きると言われています。このように、鬼子母神堂そのものが歴史的に非常に長い年限に耐えるつくりになっています。相の間は畳敷きで、拝殿と本殿を結ぶ重要な役割をしています。拝殿には、参拝者が集まるので、質素にケヤキ材を使い、しかし丁寧な加飾を凝らしています。

次に妙見宮です。日蓮宗の中では特に北極星に対する宗教的な念があり、それと関係する建物で、神社形式の建築です。

まず豊島区指定文化財として民俗文化財に雑司が谷鬼子母神御会式万灯練供養が2014年に指定されました。同年12月に、日本ユネスコ協会連盟から「未来遺産プロジェクト」として、雑司が谷一帯が指定されました。そして2016年4月に鬼子母神堂が国指定の重要文化財になり、雑司が谷地区は盛り上がっています。

今後の課題は、これらを区民だけでなく、国民全体に、いかに理解を広げていくかです。オリンピック・パラリンピックが近いことですし、外国の方にも大勢来ていただいて、感じていただきたい。雑司が谷を狭義で理解するならば、持続発展の可能性はないだろうと思います。新庁舎は根津山に建てられました。高野区長の命で新庁舎の屋上に豊島の森を造ることになり、区内全小学校の子ども約7000人の声を聞いて、森を設計しました。

まず日出小学校の校名は、この付近が古くから「雑司が谷朝日出」という地名だったことに由来します。日出は、朝日が出ると書いて「ひので」と呼んでいました。少しわかりづらいですが「朝日の出」なんです。朝日が出る場所は東側。つまり雑司が谷の東側に根津山がありました。ですから、新庁舎も昔なら、雑司が谷エリアにあったわけです。雑司が谷の字（あざ）名ですね。雑司が谷は広域的に、北区や文京区に至る非常に広い区域を指していたという歴史的な事実もございます。この広義の雑司が谷を後世に伝えていく必要があると思います。

新庁舎完成に向けて、私は日出小学校の碑文を書いていた。3分の2程度まで書いたところで、雑司が谷が未来遺産に決まったと聞き、その続きを次のようにしました。「折しも新庁舎竣工前の平成26年12月、庁舎屋上『豊島の森』に連なる雑司が谷が日本ユネスコ協会連盟の未来遺産に登録された。私たち区民は、雑司が谷の地域が育んできた歴史や文化を未来に語り継ぎ受け継いでいくことをここに誓う」と。

したがって「豊島の森」も武蔵野丘陵の面影がありますし、池袋駅から続くグリーン大通りのすばらしい並木も武蔵野丘陵の面影を残しています。その先の雑司が谷地区の森、さらには雑司ヶ谷霊園の森もすべて武蔵野丘陵の面影をそのまま残しています。池袋駅から歩いて10分で、こんなにすばらしい自然的・歴史的景観が残っているということを、これから大勢の区民に理解していただき、末永く保存発展させていくことが必要だと思っています。

先ほど、南池袋小学校の子どもたちが纏を披露してくれました。教育委員会は、教育課程に郷土の学習を位置づけ、伝統文化や歴史をつなげていきたいと思っています。子どもたちにとって、あるいは教育者にとって、地域は教材の宝庫で、子どもたちが学ぶ題材の多い場所です。そして地域全体がキャンパスと考えると、子どもたちが教室の中だけでなく、外に出かけて、まちを見て、インタビューをしてみる、関わってみる、こういうことから多くを学んでいってこれればと思います。

**阿部** ありがとうございます。次に、平井さんお願いいたします。

**平井** としまユネスコ協会の平井と申します。年度はじめの理事会で、事業計画が何も決まっていないとき、日本ユネスコ協会連盟が何年か取り組んできた未来遺産を、うちの協会でもやってみようというのが、事の発端でした。豊島区内でいくつか候補を出して雑司が谷が大筋で決まりました。その後、区長に相談して、一も二もなく雑司が谷ということで、正式に雑司が谷で進めることになりました。

我々はもともと雑司が谷に詳しくはなかったわけではなく、初めて日本ユネスコ協会連盟に提出した申請書は情けない代物で、まるで的外れなことを書いていました（笑）。その後いろいろ調べてみたら、モデル性や先進性、継続性等は、すでに雑司が谷に存在していて、何もしなくても未来遺産として通る地域だということがわかってきました。

我々はそのプレゼンテーションをどうするか考えただけです。本来であれば、新しい

プロジェクトを立ち上げて、できるだけ日本ユネスコ協会連盟の示すガイドラインに沿ったものにして申請するというのが筋でしょうが、雑司が谷に関しては、それがほとんどでき上がっていたのです。

中村校長のお話にもありましたように、地域で育っている子どもたちが、すべて将来の宝物になるはずです。その子どもたちが地域をベースにした学習を続けており、地域の大人たちがそれを支えています。大人たちはそれぞれの自分の興味ある分野で連携して、グループをつくって活動をしています。そんな大人たちが子どもたちの指導に当たっている。地域連携と持続可能性という面において、非常に理想的なパターンが、すでに構築されていたわけです。

このことは、法明寺の存在や、御会式の講をつくっている地元の方々の流れもあると思います。くわえて、葉袋先生が「新住民の方がこのまちに溶け込みやすいかどうか」という課題を学生に与えた、という話をされました。雑司が谷は非常に古い市街地の割に、新住民の方々が溶け込みやすい地域だということがわかってきました。

御会式の万灯を振る講についても、既存の団体だけが参加できる閉鎖的なものではなく、新住民の方々が新しい講をつくって参加を申し込むこともできます。これは未来遺産の枠を超えた、先進的な地域の伝承の仕方だと思います。豊島区はよくも悪くも人口の入れかわりが極めて激しい地域です。消滅可能性都市に指定された原因は、ワンルームマンションの多さと関係していると思うのですが、これだけ人口の入れかわりの激しいところで、どうやって持続可能性を担保していけばいいのでしょうか。

たとえば、一度外に出た方でも、また戻って来たくするような場所にすることが必要でしょう。それから、戻って来た方々が子育てをして、そこで育った子どもたちが、どうせ住むなら、あのあたりに住みたいと思ってくれる、そういう理想的なまちづくりのモデルとして雑司が谷を捉えたい。ですから、未来遺産で満足しないで、もっといろいろなプロジェクトをはじめていければと思っています。

**阿部** ありがとうございます。では、私からパネルディスカッションの趣旨を申し上げます。今回「池袋学」のテーマとして雑司が谷を取り上げました。ここでは、とくに雑司が谷を中心とした地域づくり、大人、そして子どもがキーワードです。先ほど平井さんがおっしゃったように、すでに雑司が谷にはソフトインフラが備わっていたと。それは何かといえば、過去につくられ、継承されてきた文化・歴史・自然と、それらが育んできた人材ですね。こういう地域の多様な資源が雑司が谷で〈見える化〉されているということです。立教大学が今回「池袋学」で取り上げましたが、すでに日本女子大学ではずっと取り組んでこられたわけですし、南池袋小学校でも学習活動の中に取り入れていた。これらは非常にすばらしい活動です。

本日は子どもたちが纏を披露してくれました。大内君の作文に象徴されるように、地域への誇りを持って、それを継承していくことを宣言する。人を含む地域の多様な資源

と関わっていく中で地域への信頼が生まれているのだろうと思います。そのことが、薬袋先生からのお話にもありましたが、雑司が谷は夜でも安心して歩ける、ということにつながっているのだと思います。つまり、地域への誇りや信頼が基盤となり、地域の安全や安心が保たれている。そういう意味で、この雑司が谷で育つ子どもたちは幸せではないでしょうか。

雑司が谷は、外から入ってきた大人も含めて、地域の人たちをつなぐ場になっています。雑司が谷は今の様な狭いエリアではなく、昔はもっと広がった。その広義の雑司が谷で、大人と大人、あるいは大人と子ども、あるいは子どもと子ども——世代をつないでいく。そういう視点で、雑司が谷の持つ可能性を、ご自身の経験を踏まえつつお話しいただいて、相互のやりとりをしてみたいと思っております。

**渡邊** 今の質問と若干ずれるかもしれませんが、人と人をつなぐというのは、このまち全体を「面」で支配していくことだと思います。面をつくっていくことは、いろいろなマップや小冊子などで紹介されています。ですが、これだけ多くの名所旧跡が集まっていますから、各所に案内板を立ててもいいですね。そして、それが一つ、二つ、三つとつながっていけばいいですね。

**阿部** ありがとうございます。次は小池さん、お願いします。案内人は地域の子ども、あるいは地域の方だけではなくて、外から来る方をご案内する場合がありますよね？ そういった視点からお話いただけますでしょうか。

**小池** 本当にいろいろなところ、他県からも来てくださいます。大人の方たちは古いまちを喜んでくださいます。また子どもたちには地元を見ていただくことになります。高南小学校、目白小学校、南池袋小学校、それから豊島区内のたくさんの小学校から来てくださっています。子どもたちを一度案内しますと、その後に 5～6 人で案内処にやって来て「この間、お話を聞いたけれど、ここのところをもうちょっと教えてください」などと言ってくれることもあります。

**阿部** 授業の一環で子どもたちが来るのですか？ それとも子どもたち独自で？

**小池** 両方ですね。以前、高南小学校の 3 年生が学年全体で来たときは、後から感謝のがきをまとめた冊子にして送っていただきました。その後、学校の授業とは別に 6 人の児童が来てくれたのですが、その子たちは、はがきとは別に学校新聞にしたものをコピーして持ってきてくれました。一度だけの体験でなく、子どもたちの頭に残って、次につなげてくれると嬉しいです。

**阿部** ありがとうございます。中村先生に伺いたいのですが、学習活動を含めて、たとえば、保護者の方の反応はどうでしょうか。

**中村** 保護者にもたくさんのご協力をいただいております。やはり子どもたちは、ものすごくエネルギーがあって、主体性もある。そしていいものにふれると、それをもとに発信しようという力は大人に負けないくらいすごいと感じています。ですから、子どもた

ちに今日のように様々な場や情報を与えていただき、感謝しております。それらを私どもは教材化して、子どもたちが発信できるようにしていきたいと思っています。

先ほど外国の方との関わりをお話ししましたが、それ以外にも多摩地域の市部から6年生を招いて、雑司が谷のマップを持って全員が外に出て案内をしました。そういう力を子どもが持っているので、どうかこれからも、子どもたちの教育にお力を貸していただけたらと思います。

**阿部** ありがとうございます。雑司が谷での活動は参加体験型の活動だと思います。大人と一緒に働いたり、伝統的知恵を継承したりする活動を通して行う学習はアクティブラーニングと呼ばれていますね。今、文部科学省が盛んに「21世紀を生きる力」を唱えています。これまでのような、教科書どおりの教育だけではいけない。新しい事態がどんどん生じるときに、創造的でないと生きていけない、と。そういった力を育むのがアクティブラーニングです。それをどんどん進めていこうと文科省が言っていますが、中村校長がおっしゃったのは、そういったものでしょうか。

**中村** そうですね。アクティブラーニングが言われて、協働性や主体性がこれから重んじられるということですが、私が思うに、そのアクティブラーニングという形式が大事なのではなく、一緒にやりたいとか、自分たちからやりたいとか、そういうモチベーションが子どもの内から生まれる、その源泉があることが大事だと思います。その点で、雑司が谷はアクティブラーニングの宝庫だと思っています。

**阿部** わかりました。ありがとうございます。続いて薬袋先生、お願いします。

**薬袋** ESDをキーワードにした地域づくりが本日のテーマですが、学生という視点から考えたときの持続可能性、とくにまちづくりを考えるとときに大事だと思うのは、その場限りの損得だけではなく、愛着を持って地域に関わり続けること。あるいは見守り続け、遠くに行ってしまうても気にかけることです。そういった思いの積み重ねが、よいまちをつくっていくのだと思います。雑司が谷には、きっかけがたくさん転がっているような気がします。ただ、それが目に見えやすい状態になっていない。

日本女子大学へ着任する前は福井大学におりまして、田原町のまちづくりをやっておりました。福井大学には外から来る学生が多いので、二言目には「田原町は私の第二のふるさとです」と言いながら、田原町のまちづくり活動に関わった学生が卒業していくんですね。毎年総会があるときに日程がメーリングリストで流れると、都合のつく学生が前の晩に集まって飲み会をしていました。そのように言葉を発信できる機会をつくっていくと、仕事等で遠くに行っても、将来結婚して家を買うときに、雑司が谷を思い出すのかもしれない。

そういう愛着は「ありがとう」と感謝されることから生まれるのかもしれない。自己肯定感という言葉がありますが、やはり人は誰かとつながること、自分が「ここにあなたがいてくれてよかった」ということが、実感として伝わったときに「私、ここが好

き。私のまちだ」と思えるのではないのでしょうか。

学生からは、すぐ何かが返って来ないかもしれませんが。ですが、ぜひ何か機会があれば「来てくれてありがとう」とか「やってくれてありがとう」と言ってもらえると、もしかしたら 10 年後、いい住民になって帰ってきてくれるかもしれません。それが、消滅自治体ではなくすことだと思っていますので、ぜひご協力をお願いします。

**阿部** ありがとうございます。今日のシンポジウムの結論的なことも併せてお話ししていただきました。三田教育長、いかがでしょうか。

**三田** 南池袋小学校の例でありましたように、豊島区で生まれ育った子どもたちには、ふるさとを学ぶ機会がたくさんあります。豊島区教育委員会では今、「豊島教育ビジョン 2015」の中に「豊島ふるさと学習プログラム」を充実させていくことを考えています。子どもたちを学年に応じた学習に位置づけて、子どもたちがまちに出かけて、地域の人に話を聞いたり、観察したり、実際に調べて考えて、また話を聞くことができる教育を進めております。かつて「ディスカバー・ジャパン」という言葉がありましたが、まさに「ディスカバー・トシマシティ」と申しますか、子どもたちがふるさとを見直し、そして歴史や文化を身につけながら、将来や世界を見つめていく。そういう子どもに育てほしい。これこそが、地域に学んで地域の人とつながっていくことであり、持続可能なまちづくりを保証していくステージをつくることでしょう。ですので、私どももこれを機会に一層「豊島ふるさと学習プログラム」を充実させていきたいです。

**阿部** 「豊島ふるさと学習プログラム」はいいですね。ぜひ推進をお願いいたします。では最後に平井さん、お願いします。

**平井** 今、いかに雑司が谷が資源的にすぐれているかという話が出ました。豊島区に限らないのですが、こういう地域性のよさをどうやったら他所に広められるかが、これからの検討課題だと思います。独り占めするだけが能ではないので、どのような形で雑司が谷の地域性が生まれてきたのか、研究していく必要があるのかもしれません。雑司が谷の特徴は、古くから住んでいる方が多い、というだけではないということが今日のお話の中でわかりますので、他のまちにも転用できる部分が多々あると思います。学校だけの努力でできるものでもありませんし、行政の力でできるものでもない。いかに地域に住んでいる方々が、その地域を捉えていくかにかかっていると思います。皆さまの住んでいる地域をどう考えれば、雑司が谷モデルのようになるのか。今までの話だと雑司が谷モデルは良い方向だという結論だと思いますので、どうすればそれを広めていけるのか。それを考えることが、これまで皆さまが築き上げてきた、すばらしい地域の伝統を普遍的なものにしていく道の一つなのではないかと思っています。

**阿部** ありがとうございます。雑司が谷の様々な資源を〈見える化〉し、そして〈つながり化〉していく。私は ESD を「つながり学習」と捉えています。地域住民が誇りをもち、自己肯定感を高めていける、そして自分自身だけでなく、他者に対する思いやりや未来

への創造力を育てていけるような活動ができると思います。それはただ単に、雑司が谷を今のまま保全していく、あるいは今のまま伝えていくことではありません。時代に対応しながら、いかに持続させていくかが大事です。先ほどヒガンバナのお話がありましたが、新たな視点で地域を創造していくことも必要ではないでしょうか。これからは大人と子どもが協働しながら、地域の人、そして外の人も含めた取り組みが求められます。そして雑司が谷そのもの、あるいは雑司が谷で培った経験を外にも伝えていけるような地域づくりがなされていくことを期待します。本日はどうもありがとうございました。



